

# 大槌町地域復興協議会 復興計画

- ・ 町方地域復興協議会復興計画  
(会長 小向 幹雄)
- ・ 桜木町・花輪田地域復興協議会復興計画  
(会長 中村 盛観)
- ・ 小枕・伸松地域復興協議会復興計画  
(会長 三浦 勝男)
- ・ 沢山・大ヶ口地域復興協議会復興計画  
(会長 阿部 敬一)
- ・ 安渡地域復興協議会復興計画  
(会長 赤崎 友洋)
- ・ 赤浜地域復興協議会復興計画  
(会長 川口 博美)
- ・ 吉里吉里地域復興協議会復興計画  
(会長 藤本 俊明)
- ・ 浪板地域復興協議会復興計画  
(会長 臺野 宏)
- ・ 小鎚地域復興協議会復興計画  
(会長 藤原 市之助)
- ・ 金沢地域復興協議会復興計画  
(会長 兼澤 平也)

## <注 意>

- ・ 各地域復興協議会から提案して頂いた復興計画につきましては、12/4（日）開催の第2回大槌町地域復興協議会全体会で決定されるものではありません。今後さらに町及び復興関連会議で協議を行い、『大槌町震災復興計画』として議会に提案し、承認を得ることになります。
- ・ 年明けには「住宅再建に関する意向調査」を実施する予定です。その後、国や県、復興事業メニュー（制度）との調整を図りながら、町民の皆様で策定して頂いた復興計画を反映しつつ、事業実施計画を策定することになります。
- ・ 協議会で策定の復興計画及び復興計画図は、町の計画策定段階で変更となる場合があります。

## ■町方地域復興協議会復興計画

### 【まちづくりの方向】

- ・城山を中心に歴史と文化を大切にしたい、海と山との関わりのある自然と共生できるまちづくり。
- ・安全・安心・豊かで住みよいまちづくり。
- ・少子高齢化が進んでも今までのコミュニティを維持し、住民みんなが元気でいられるまちづくり。

### 【まちの中心・居住地・施設配置】

- ・城山を中心とした被災前の場所に市街地（居住地・商業地）を再生し、旧道沿いは盛土等により安全性を高める。盛土は2mから5m程度を希望する。
- ・より一層の安全性を確保するため、大槌川、小槌川沿いに移転住居地を確保し、公営住宅等を整備する。
- ・栄町にはメモリアル公園又は寺野スポーツ施設の移転を検討し、須賀町は産業用地として企業の誘致を図る。
- ・役場の位置とまちの中心部との関係は重要であり、浸水区域外である旧大槌保育所を中心としたエリアを公有地として活用し、公共施設を集約する。

### 【防潮堤】

- ・市街地を形成するためには、T.P.14.5mの防潮堤は必要。
- ・人力ではない水門又は防潮堤にスロープを設置する。

### 【津波防御施設】

- ・人や家屋の流出と浸水深の抑制、津波速度の減速、より良い景観づくりに向けて、防潮堤の内側（陸側）や川沿いに防潮林を整備する。
- ・市街地の中・高層ビルを連続して建設し（1階部分は駐車場や店舗、2階以上を居住地とする等）、城山までの避難道（日常の用に供する街路・広場等を兼ねる）を数多く整備する。
- ・JRの線路を嵩上げして二重の防御とし、現在の踏切を高架橋にする。さらに道路を拡幅することにより、須賀町・栄町方面からの交通の利便性を良くし、災害時には速やかな避難を可能とする。
- ・城山まで距離のある須賀町・栄町（緑地・産業エリア）地区に、避難ビルを兼ねた多目的ビルを設置する。

### 【避難】

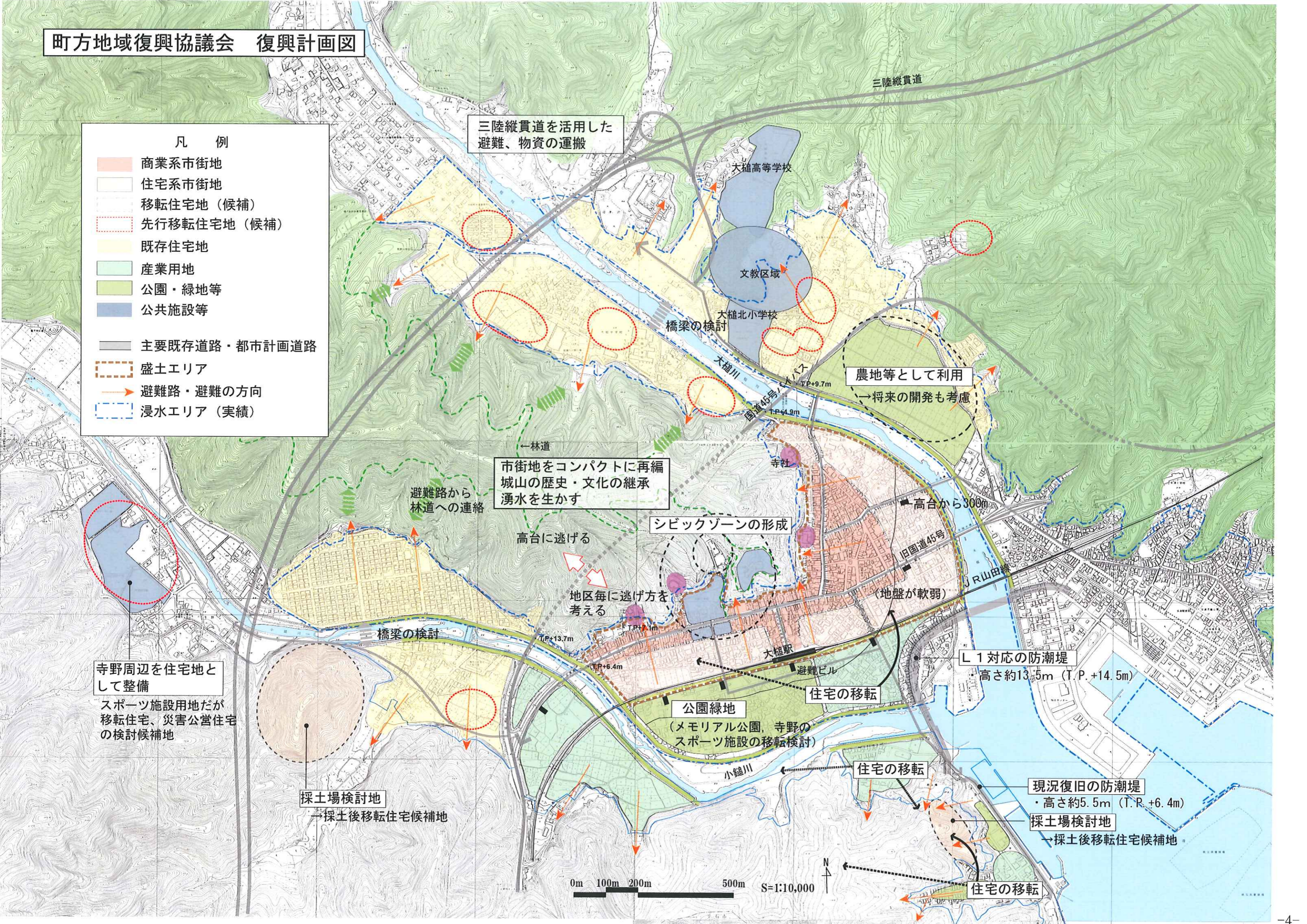
- ・高齢者や障がい者等、自力で移動が困難な人を十分に考慮した避難計画を策定する。
- ・避難所の核となる城山へのアクセスを改善し、城山の駐車場が緊急時に確実に利用できるよう対応マニュアルを整備する。
- ・車で避難ができるよう渋滞しない幅員の確保、高齢者の立場を考えた避難路の整備が必要。

- ・中央公民館をはじめとする主要避難施設や道路等に、夜間の避難に不可欠な照明設備を設置する。
- ・土坂トンネルの早期実現及び大槌川、小槌川の流域を連絡するトンネルを整備（大ヶ口～寺野付近）し、日常生活及び災害時における交通網の利便性を高める。
- ・海が見える、見えないに関わらず、地震が来たらすぐに逃げるのが重要であり、徹底した避難訓練が必要。



町方地域復興協議会 復興計画図

- 凡 例
- 商業系市街地
  - 住宅系市街地
  - 移転住宅地（候補）
  - 先行移転住宅地（候補）
  - 既存住宅地
  - 産業用地
  - 公園・緑地等
  - 公共施設等
  - 主要既存道路・都市計画道路
  - 盛土エリア
  - 避難路・避難の方向
  - 浸水エリア（実績）



三陸縦貫道を活用した  
避難、物資の運搬

大槌高等学校

文教区域

大槌北小学校

橋梁の検討

大槌川

旧国道45号

農地等として利用  
→将来の開発も考慮

市街地をコンパクトに再編  
城山の歴史・文化の継承  
湧水を生かす

避難路から  
林道への連絡

高台に逃げる

シビックゾーンの形成

地区毎に逃げ方を  
考える

(地盤が軟弱)

L1対応の防潮堤

高さ約13.5m (T.P.+14.5m)

寺野周辺を住宅地と  
して整備

スポーツ施設用地だが  
移転住宅、災害公営住宅  
の検討候補地

橋梁の検討

高台から300m

旧国道45号

JR山田線

大槌駅

避難ビル

住宅の移転

公園緑地

(メモリアル公園、寺野の  
スポーツ施設の移転検討)

小槌川

住宅の移転

現況復旧の防潮堤

高さ約5.5m (T.P.+6.4m)

採土場検討地

→採土後移転住宅候補地

採土場検討地

→採土後移転住宅候補地

0m 100m 200m 500m S=1:10,000





## ■桜木町・花輪田地域復興協議会復興計画

### 1. 海岸防潮堤について

今回の津波では、桜木町・花輪田地区ともに民家は一部を除き比較的被害は軽く大規模半壊が多く、家屋修理後自宅に復帰している家が相当数あります。しかし、桜木町東大通り東側と大槌浄化センター、マストの湯、ホームック、ショッピングセンター等は大々的な全壊状態で、その施設や、手前の構築物の影響で花輪田は波の勢いが殺がれた結果ではないかと考えられます。

【考察1】岩手県の示した海岸防潮堤高さ(海拔14.5m)のシミュレーション結果では桜木町・花輪田地区では、花輪田マスト駐車場エリヤマで1m未満の浸水となっています。そこで、4つのCASE study 中では“CASE3”が better であると評価できることから、

- 桜木町・花輪田地区としては防潮堤の高さは14.5mを要望する。
- 但し、小枕地区(TP+6.4m)からの流入がないことを前提とする。

### 2. 津波等に備える小槌川河川管理について

【考察2】それでも家財・施設が守れないので、津波と洪水対策として河川堤防の嵩上げが必要。

- ① 桜木町側は古廟橋から上流800mまで堤防上端の嵩上げが必要です。また、桜木町西児童公園付近は洪水時に、西側高清水地区からの伏流水で15号線付近の住宅、道路が都度冠水していることから鋼製シートパイル打設などで水封対策が必須。
- ② 花輪田側も古廟橋から上流600mまで堤防上端の嵩上げが必要であり、同時に生活用道路となっているので2車線に拡幅し、両岸共にシートパイル等の漏水対策が必要。
- ③ また、古廟橋の下流570mに渡り嵩上げと、特に大槌浄化センター付近では堤防上端に波返しのある海岸堤防に改修し、堤防東端と繋がる山側との間に頑丈な水門を設ける。
- ④ 桜木町ポンプ場の排水口出口から海水が逆流してくることから逆流防止機能を付加する。
- ⑤ 津波駆け上がり対策と河川洪水対策として小槌川河床の浚渫が必要で、「立石の淵」の付近から下流の大槌浄化センター前までの範囲を定期的に浚渫する必要がある。

### 3. 花輪田地区の下水路等の整備について

【考察3】住宅への影響を抑えるためには河川堤防の越入防止と、下流からの逆流水制御が必要であり、エリヤ内の水路の管理レベルを上げる一方、構造物による封水が必要である。

- ⑥ 生井沢奥の砂防ダムから大槌浄化センター裏に至る水路は未整備部分があるので、水の制御が困難であり、早急に整備する一方、小槌川出口には前項③④の遠隔式水門が必要。
- ⑦ 県道(旧国道45号線)古廟橋とバイパス交差点間が低いので嵩上げる。また、現県道と国道の下をくぐる水、人道など3か所のトンネルには有事の際の開閉式水門を設置する。

### 4. 避難場所の整備・指定と避難道路整備について

【考察4】目下両地区とも、行政の指定する避難場所が明確ではないので、整備して指定する。また、津波や山林火災発生時に避難所が孤立しないための連絡道等の必要性がある。

- ⑧ 桜木町会館通り裏手に、住民の大半が避難できる面積と海拔10m程度の高台を整備。
- ⑨ 高台には緊急避難物資プレハブ倉庫を建設してほしい。
- ⑩ 裏山林道への連絡道及び1号線から5号線間に海拔10m程度の避難道路を整備。
- ⑪ 将来的には三陸縦貫道路への連絡道を整備してほしい。

- ⑫ 花輪田は現ローソン駐車場から寺野線三宮パーマ屋さん向い付近に避難所を設けたい。
- ⑬ もう1か所は現生井沢臼沢氏宅隣り空地から、生井沢仮設住宅集会所に変更したい。
- ⑭ 前項⑬付近に恒久的な避難所を建設して、緊急避難物資も整備したい。
- ⑮ 今回津波・山林火災両方に追われた経験から、生井沢仮設住宅から寺野集落に避難する「うるささ沢」道路を整備してほしい。
- ⑯ 避難路となる道路を中心に、災害時にその機能を確実に確保するため電線類を地中化する。これにより、ライフラインの早期復旧の可能性が高まる。

### 5. 新しい町づくりに関わる生活道路などの対策

【考察5】津波浸水地域を避けた仮設住宅が、小槌方面や生井沢・寺野・臼沢方面に数多く建設、また仮設小・中学校が建設されて生徒の徒歩・自転車通学が増えたこともあって、街の生活ゾーンが移動しており、小槌川両側道路は町の重要幹線道路になりました。

そこで、当面緊急に対策すべき事項と、今後の街の形成上の重要な事項がありますので生活道路又は避難道路として重要な改善について項目を整理します。

- A. 町道小槌線は、桜木町付近では一車線であり、正規の歩道を備えた二車線道路が必要。
- B. 同じく小槌線歩道は幅・平坦度に問題があり、高齢者・児童の通行に支障のないよう歩道の切り下げによる凹凸のない広幅のものにしてほしい。
- C. 小槌線道路は枝線との連絡、道路粉じんの関係から堤防とは独立した現状方式とし、なお近い将来の高齢者避難車両を考慮すれば拡幅は必須で緊急対策と思われる。
- D. 花輪田地区と桜木町地区を結ぶ橋を設置し、この地区の避難連絡ルートを確認する。
- E. 生井沢通学路は、昔のリヤカー農道で学童通学に車両とすれ違う場合には非常に危険、早急に拡幅して、さらに街灯を設置し、子供達の安全を確保する必要がある。
- F. 町道寺野線と堤防古廟橋袂～仮設小・中学校校舎迄の2系統の道路に街灯を設置する。

### 6. 抜本的な新しい町づくりに関するアイデア

(1) 町方の盛土用採土場は原案の生井沢と寺野間の山でなく、度々土砂崩れしている高清水地区とつながる桜木町裏山(急傾斜地部)を対象にして山を切り高台を造成して縦貫道はトンネルでなく青空の見える道路とすれば、①. 桜木町側と高清水地区の急傾斜土砂崩れ危険箇所解消と、②. 市街地採土工事、③. 三陸道工事とのコスト軽減対策、④. 桜木町側源水側の避難場所確保、⑤. 高台に一般住宅、高齢者施設、病院、銀行等配置することによりU字型の市街地がO型となり、歴史的に意味を持つ城山は残して周囲に市街地が展開される「おーちゃんタウン」ができます。これにより人の流れができて、将来の町の発展につながり、一石五鳥がもっと発展的に効果が期待されることとなるでしょう。

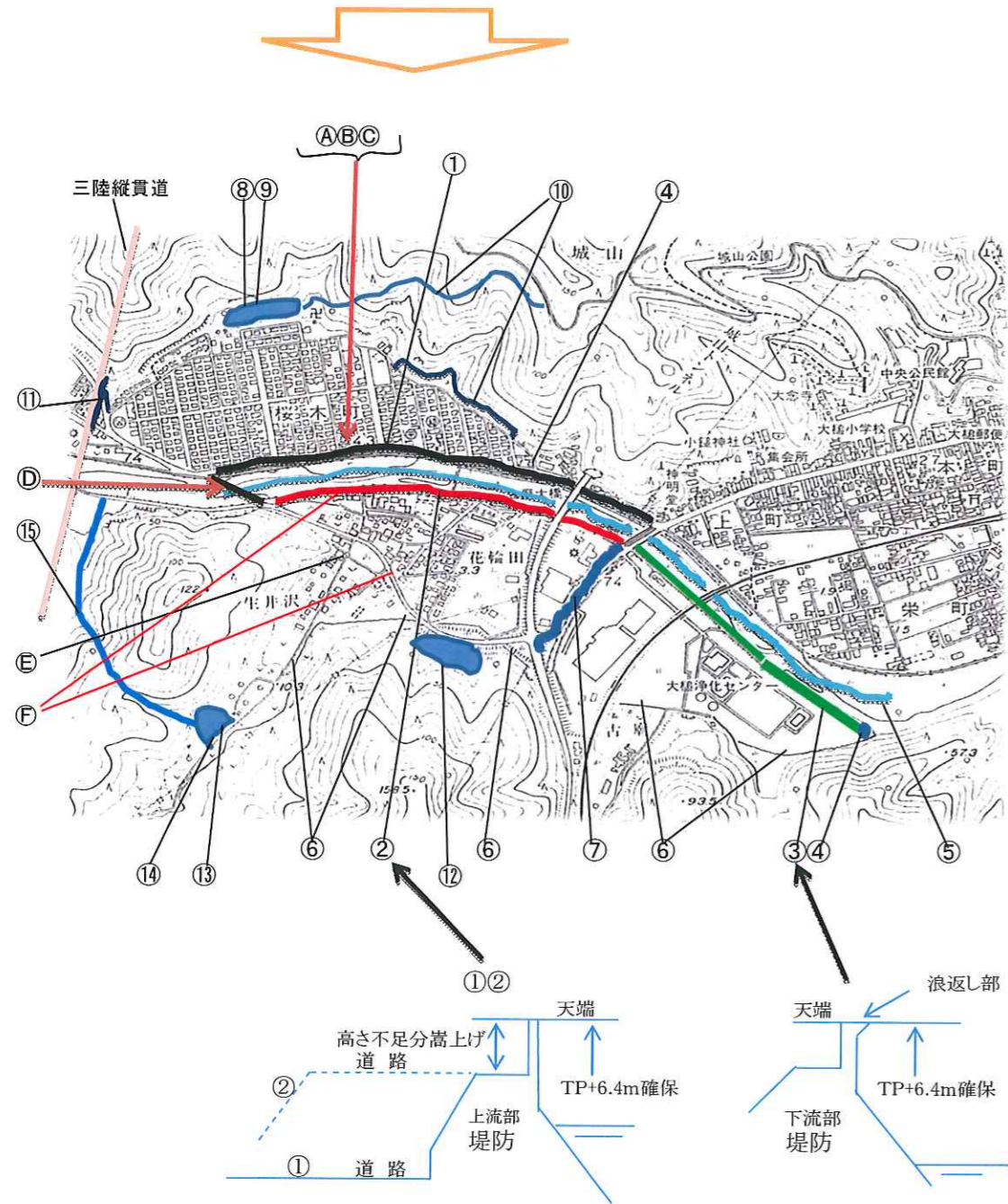
何よりのメリットは、土地の足りない大槌町に有効な市街地となる土地が生まれることで津波を避ける安全・安心な生活拠点を求める住民を繋ぎ止め、大幅人口減少に歯止めを掛けることが必要であり、この時期を置いて他にはチャンスが無いと言えるでしょう。

(2) 海拔14.5mの防潮堤は、コンクリートでは圧迫感があるので、町民で植樹祭を行い、低木や花木などをデザインした植林により須賀町産業ゾーンと調和させれば、安全と環境の調和のとれた防災整備が可能と考えます。



### 桜木町・花輪田地区の対象場所の参照図

- 【考察1】 海岸防潮堤は 14.5mに賛成
- 【考察2】 河川堤防の嵩上げ → ①②③④⑤
- 【考察3】 下水路対策など → ⑥⑦
- 【考察4】 避難場所、連絡通路 → ⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯
- 【考察5】 周辺生活道路の改善 → ⑰⑱⑲⑳㉑㉒





# 桜木町・花輪田地域復興協議会 復興計画図

三陸縦貫整備とあわせた城山を囲む市街地形成、安全が確実に確保される高台へ公共施設を配置

三陸道を利用した多方面への避難経路の確保

車で小鍬方面へ逃げるための動線強化

歩道整備・歩行者の安全性確保

伏流水対策

桜木・花輪田を結ぶ小鍬川横断動線強化

堤防天端を活用し2車線道路を整備

通学路としての安全性確保

寺野へ抜けられる防災道路の確保

仮設集会所を本設の避難場所として整備

林道への連絡道路整備

避難場所の整備・充実

避難道路整備

道路機能の充実歩行者安全性の確保

T.P. +6.4mへ堤防嵩上げ

横断排水路からの逆流防止

河床の定期的な浚渫

下水対策の実施

街灯設置

県道の嵩上げ

水門の設置

避難場所の整備・充実

水路改善

新水門の設置

- 凡 例
- 商業系市街地
  - 住宅系市街地
  - 移転住宅地（候補）
  - 先行移転住宅地（候補）
  - 既存住宅地
  - 産業用地
  - 公園・緑地等
  - 公共施設等
  - 主要既存道路・都市計画道路
  - 盛土エリア
  - 避難路・避難の方向
  - 浸水エリア（実績）





## ■小枕・伸松地域復興協議会復興計画

### 【まちづくりの方向】

- ・居住については「被災前の場所」、「小枕・伸松地域に造成する高台への移転」、「小枕・伸松地域以外への移転」の3つの希望に別れている。移転先など居住地の考え方については、全体計画が固まってきた後に再度検討する。
- ・低地部は産業、中段は緑地とし、無理な盛土造成は行わない。居住地や集会所等については、小枕地区と伸松地区に挟まれた高台に移転する。ただし、あまりにも希望者が少ない場合は、居住地をつくらず全員他地区へ移転することも検討する。
- ・小枕・伸松地区の低地部及び小枕地区の山側に残った住宅と、高台移転候補地との連絡道兼避難道を整備する。

### 【まちの中心・居住地・施設配置】

- ・宅地造成するための工期は短くし、用地を効率的に利用できる公営住宅（集合住宅・戸建て）を整備する。また、個人負担を考慮した公営住宅を希望する。
- ・海側に面する高台であるため、北風対策や日当たりを考慮した宅地造成が必要。
- ・仮に町の中心部が大槌小付近となり、須賀町・栄町地区が居住地とならなかった場合、小鏡川を挟んで小枕・伸松地域が町の中心部と離れてしまうことが課題。日常生活面においても、孤立しないようなまちづくりが必要。

### 【防潮堤】

- ・小鏡川水門付近の伸松地域の防潮堤はT.P.14.5mとするが、小枕地域は基本的に高台移転であるため、現状維持のT.P.6.4mの防潮堤とする。

### 【避 難】

- ・①県道から高台候補地に向かう避難道、②産業用地から小枕を通り高台候補地に抜ける避難道、③高台候補地から伸松を通り、小鏡川沿いから国道45号（古廟）に抜ける道路の3本を主要道として整備する。
- ・避難道は車でも避難できるよう拡幅し、日常生活も考慮して緩傾斜とする。また、高台候補地には集会所兼避難所を設置する。

### 【漁 港】

- ・漁港等の施設については、早期に漁業が再開できるよう復旧する。



# 小枕・伸松地域復興協議会 復興計画図

住宅は町方以北への移転も検討  
被災前と同規模の産業用地を確保（伸松）

屈曲した道のショートカットを検討する

造成量を抑制し、公営住宅を配置することにより、50~60戸の住宅を確保（切土造成）

流出を免れた住宅との連絡を確保

L1対応の防潮堤  
・高さ約13.0m (T.P.+14.5m)  
・山付け

防潮堤機能を侵さないよう県道を配置

現況復旧の防潮堤  
・高さ約5.5m (T.P.+6.4m)

被災前と同規模の産業用地を確保（小枕）

- 凡 例
- 移転住宅地
  - 既存住宅地
  - 産業用地
  - 公園・緑地等
  - 既存道路
  - 道路の改修・新設
  - 盛土エリア
  - 避難路・避難の方向
  - 浸水エリア（実績）



S=1:3000





## ■ 沢山・大ヶ口地域復興協議会復興計画

### 【まちづくりの方向】

- ・ 沢山・源水・大ヶ口地域の浸水区域を防潮堤で守ることで浸水区域外とし、震災前の居住地を引き続き利用する。また、町方からの移転者を受け入れるための宅地を新たに造成する。

### 【まちの中心・居住地・施設配置】

- ・ 大槌中学校跡地から大石の淵までを区画整理し、地区内での孵化場の移設や源水川の公園化と共に、宅地造成により町方からの移転者を受け入れる。
- ・ 大ヶ口町営住宅跡地、大槌中学校跡地に公営住宅とシルバーハウジングを整備する。
- ・ 被災した町内の小中学校を大槌高校付近に小中一貫校として誘致して、大槌高校から大槌北小学校までの一体を町の文教拠点として整備する。
- ・ 源水・大ヶ口地区から小中一貫校への通学を考慮し、三陸縦貫道入口付近の大槌川に新たな架橋を設置する。
- ・ 三陸縦貫道インター付近に物販やインフォメーション、フードコートなどを設け、災害発生時の避難所としての役割を持たせ、さらに、バスターミナルも併設した拠点的な整備を行う。
- ・ 文教拠点の環境を守るため、開発するインターとのすみ分けをしっかりと行う。
- ・ 三陸縦貫道から市街地へのアクセス道路については、防潮堤上部を介して安渡まで繋げる。
- ・ 今後発展すると思われる大槌川流域住宅と小槌川流域住宅を結ぶトンネルが必要。
- ・ 沢山地区の宅地開発に際しては、内水氾濫がおきないように排水に留意する他、増加する交通量に対応した道路の拡幅を行う。

### 【防潮堤】

- ・ 沢山、大ヶ口、源水地域を浸水区域外とするため、T.P.14.5mの防潮堤は必要。
- ・ 防潮堤上部に道路を設け、赤浜・小枕間を通し、魚市場にもアクセスできるようにする。さらに、大槌川の河川堤防を拡幅し、三陸縦貫道のインターまでアクセスできるようにする。
- ・ 遠隔操作で開閉できる水門を整備する。

### 【津波防御施設】

- ・ 大槌川北側の国道45号線バイパスを嵩上げし、バイパス下のトンネルには防潮扉を設置する。
- ・ 源水川の水門を改修し、大ヶ口川には新たに水門を設置する。

- ・ 津波及び治水対策として、大槌橋付近までの大槌川河川堤防を嵩上げする。

### 【避難】

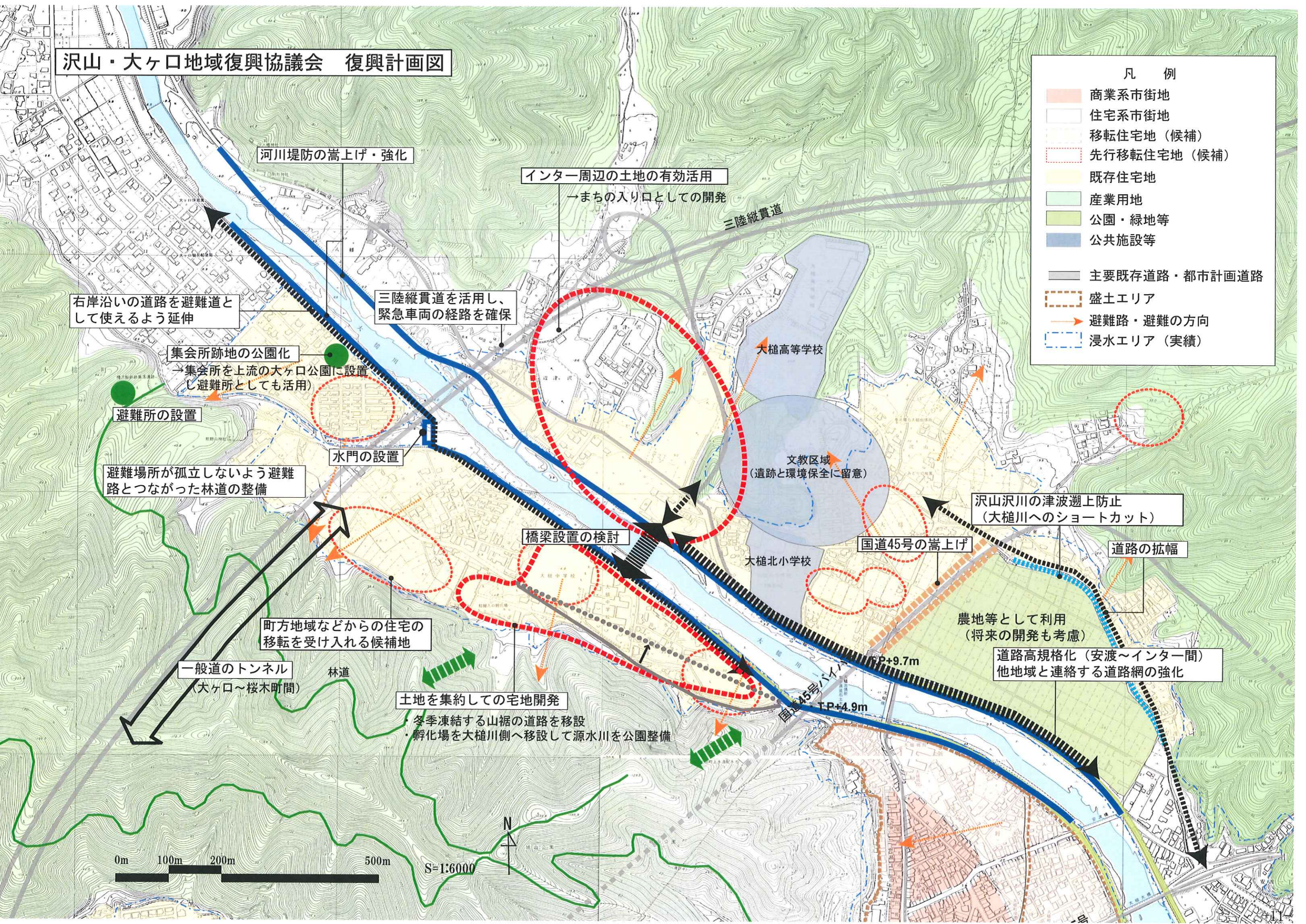
- ・ 町民の防災意識を高め、すぐに避難する土壌をつくる。

- ・ 大ヶ口から城山間の林道を拡幅し、付近には備蓄倉庫等の避難施設を設ける。
- ・ 県道大槌川井線の渋滞対策及び「かみよ稲穂館」への避難路として、大槌橋から小松野橋までの山側に避難路を整備する。また、大槌橋は老朽化のため架け替えが必要。
- ・ 海側からの避難路として、防潮堤にスロープを数ヶ所設置し、防潮堤の内側には避難塔を設置する。
- ・ 大ヶ口地域は大ヶ口多目的集会所、源水地域は孵化場裏山仮設住宅跡地に避難所を設置し、双方に備蓄倉庫と電源及び通信（衛星電話）インフラを整備する。
- ・ 三陸縦貫道のトンネル入口付近に緊急車両待機場所等を設け、この広場を一時避難所としても活用する。



# 沢山・大ヶ口地域復興協議会 復興計画図

- 凡例
- 商業系市街地
  - 住宅系市街地
  - 移転住宅地（候補）
  - 先行移転住宅地（候補）
  - 既存住宅地
  - 産業用地
  - 公園・緑地等
  - 公共施設等
  - 主要既存道路・都市計画道路
  - 盛土エリア
  - 避難路・避難の方向
  - 浸水エリア（実績）



河川堤防の嵩上げ・強化

インター周辺の土地の有効活用  
→まちの入り口としての開発

右岸沿いの道路を避難道として使えるよう延伸

三陸縦貫道を活用し、緊急車両の経路を確保

集会所跡地の公園化  
→集会所を上流の大ヶ口公園に設置し避難所としても活用

避難所の設置

避難場所が孤立しないよう避難路とつながった林道の整備

水門の設置

橋梁設置の検討

大槌高等学校

文教区域  
(遺跡と環境保全に留意)

大槌北小学校

沢山沢川の津波遡上防止  
(大槌川へのショートカット)

国道45号の嵩上げ

道路の拡幅

町方地域などからの住宅の移転を受け入れる候補地

農地等として利用  
(将来の開発も考慮)

一般道のトンネル  
(大ヶ口～桜木町間)

土地を集約しての宅地開発

冬季凍結する山裾の道路を移設  
・孵化場を大槌川側へ移設して源水川を公園整備

道路高規格化(安渡～インター間)  
他地域と連絡する道路網の強化



S=1:6000





## ■安渡地域復興協議会復興計画

### 【まちづくりの方向】

- ・安渡地域のコミュニティを大切にし、高台移転を基本としたまちづくりを行う。
- ・低地部については商業地、工業地、漁業者の作業場等の利用を基本とする。
- ・このような悲劇を二度と繰り返さないため、町及び地域が一体となった防災教育を行う。

### 【まちの中心・居住地・施設配置】

- ・高台移転を基本とし、安渡小学校を中心としたまちづくりを行う。国道45号沿いも開発し、公営住宅等を整備する。
- ・安渡小学校を改修し、公民館施設、高齢者福祉、学童クラブ、保育所など多角的な生涯学習機能を持った施設とする。
- ・安渡小学校体育館を改修し、防災施設としての機能を充実させる。
- ・高台から低地まで繋がりのある開発（居住地ー公共施設ー商工業・漁業）を目指す。
- ・低地部から安渡小学校までの道路の整備（拡幅）が必要。また、安渡小学校の海側にJRの路線があるため、道路整備の際には課題となる。

### 【防潮堤】

- ・防潮堤はT.P.14.5mを前提とし、防潮扉ではなくスロープを設置する。
- ・安全面の確保と圧迫感を与えないデザインとし、波が一個所に集中しないよう、なめらかな線形にする。
- ・堤内地を有効活用するため、防潮堤はできるだけ海側に配置し、上部は二車線道路として活用する。
- ・高い防潮堤により海面視界が遮られたことを補完するため、潮位変動や津波発生を知らせる仕組みを検討する。

### 【津波防御施設】

- ・低地部の商工業及び漁業従事者の避難場所として、主要箇所に避難ビルを設ける。また、緊急時以外は地域が有効に活用できるよう検討する。

### 【避難】

- ・防潮堤には緩やかなスロープが複数必要であり、車での避難が可能な避難道の整備が必要。
- ・高台移転した場合、安渡の土地は限られていることから、緊急時に集落が孤立しないような道路整備が必要。
- ・安渡から赤浜に抜ける林道を拡幅し、国道まで繋げる。

- ・今回のように防災無線が機能しなかった場合を想定し、災害発生時の周知方法につ

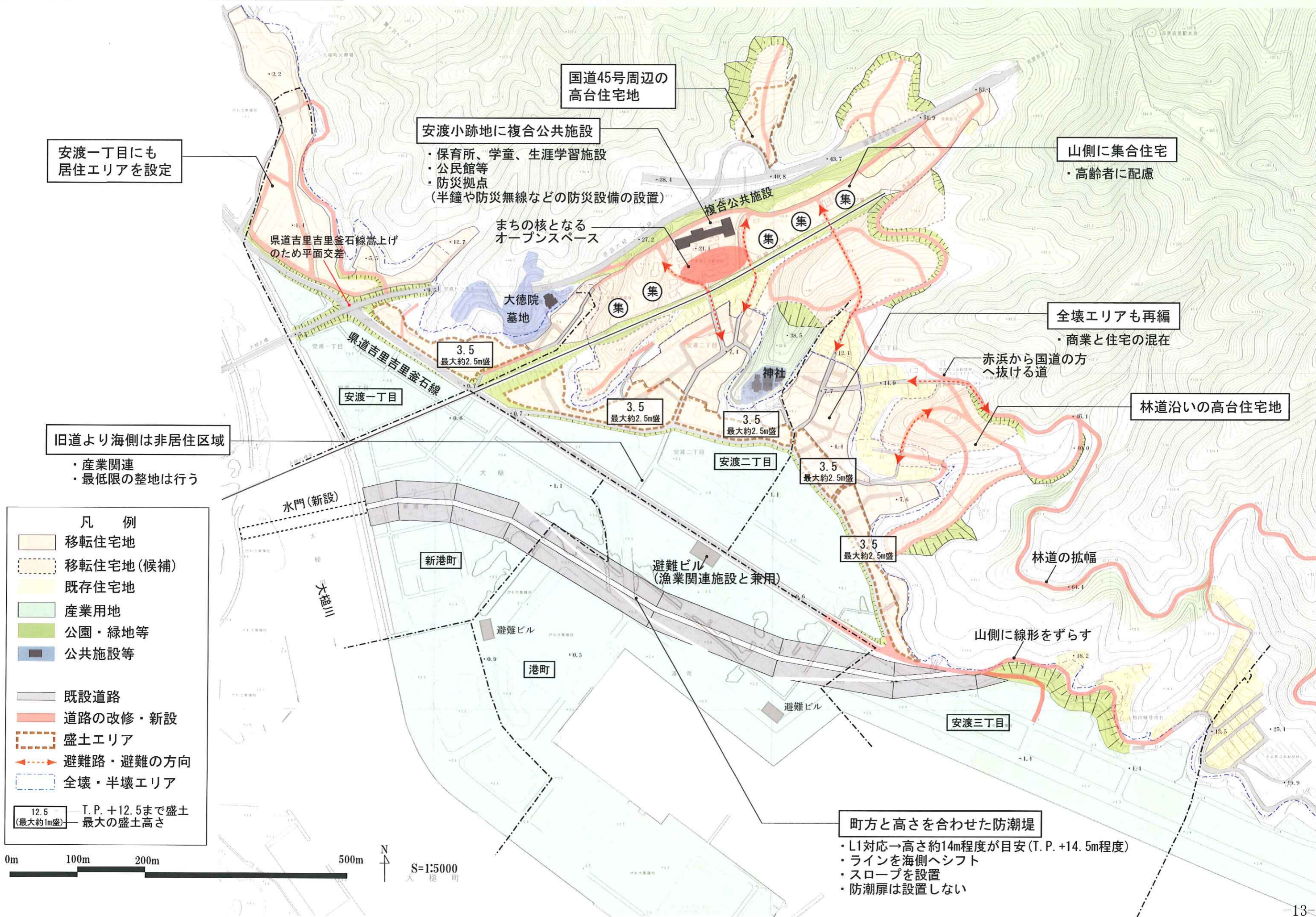
いての機能強化が必要。

### 【漁港】

- ・漁港を早期に整備し、必要な関連施設も早急に整備する。
- ・震災による地盤沈下のため、大槌漁港の県有地や新港町、さらには安渡の中心部が大潮の度に浸水する。地域の活性化のために漁業・商業用地として低地部を活用するには、盛土等による地盤の整備が必要。



# 安渡地域復興協議会 復興計画図



安渡一丁目にも  
居住エリアを設定

安渡小跡地に複合公共施設  
・保育所、学童、生涯学習施設  
・公民館等  
・防災拠点  
(半鐘や防災無線などの防災設備の設置)

山側に集合住宅  
・高齢者に配慮

まちの核となる  
オープンスペース

全壊エリアも再編  
・商業と住宅の混在

県道吉里吉里釜石線  
線高上げのため平面交差

赤浜から国道の方  
へ抜ける道

旧道より海側は非居住区域  
・産業関連  
・最低限の整地は行う

林道沿いの高台住宅地

- 凡 例
- 移転住宅地
  - 移転住宅地(候補)
  - 既存住宅地
  - 産業用地
  - 公園・緑地等
  - 公共施設等
  - 既設道路
  - 道路の改修・新設
  - 盛土エリア
  - 避難路・避難の方向
  - 全壊・半壊エリア
- 12.5 T.P.+12.5まで盛土  
(最大約1m盛) 最大の盛土高さ

町方と高さを合わせた防潮堤  
・L1対応→高さ約14m程度が目安(T.P.+14.5m程度)  
・ラインを海側へシフト  
・スロープを設置  
・防潮扉は設置しない



## ■赤浜地域復興協議会復興計画

### 1. 趣旨

生涯忘れる事のできない3月11日の東日本大震災津波から7か月が過ぎ、避難所生活から仮設住宅へと日々の暮らしも少しではあるが前進している。

しかし、赤浜地区住民960余人中、死者45人、行方不明者48人、計93人と全住民の1割が犠牲となった未曾有の大災害から立ち上がるには、災害前の防災体制と被災状況を十分に精査検証し、その教訓を復興計画に反映させることが不可欠である。

防災意識の徹底を図り、“災害に強い人造り”を基本に、生命遵守を最優先とした復興計画を策定するものである。

### 2. 基本方針

#### (1) 災害に強い人造り

防災施設も災害に強い街も全て人が考え策定するが、防災意識の啓蒙不足の昨今では、自然猛威に立ち向かうことは不可能に近い。犠牲者を一人でも少なくするには、防災意識を核とした人造りが必要不可欠と考える。

学校現場での授業カリキュラムに防災意識の啓蒙等も必要と思われる。

#### (2) 防波堤

台風、高潮対策用は防波堤、生命と財産を守るのは防潮堤とし、2種類を設置すべきと考える。

防波堤は既存施設を修繕復旧し、防潮堤は住家高台移転の擁壁として、最低でも海拔15m～18mとする。(海拔20m～30mを住宅用地造成とする)

#### (3) 県道釜石吉里吉里線

赤浜地区の大動脈とし県道釜石吉里吉里線が通っているが、今現在、大津波の被災地区の中央にあり、今後の開設は不可能と思われる。よって、図面記載のとおり路線変更し、住家高台移転地に移行すべきと考える。

#### (4) 高台住宅地

被災地の利用計画が未だ正式に決定されていないが、赤浜地区の要望としては、現在の赤浜小学校校庭を4～5m嵩上げし、バスセンター車庫付近までの左側山を切り、盛土し住宅用地を造成する。(現在の県道釜石吉里吉里線の吉里吉里方面に向かい左側に寄せることとする。)

更に旧児童館付近より三丁目住宅地への大規模避難道を併設した高台住宅地を造成する。

#### (5) 大規模避難道 (巾11m)

別添図面参照。大規模避難道として、赤浜小学校裏側より安渡に通じる林道に繋げる。更に、県道釜石吉里吉里線を路線変更し、バスセンター付近より一直線に国道45号線吉里吉里トンネル下付近に連結させる。

#### (6) インフラ関係施設

防災無線等電気関係は太陽光パネル発電と蓄電池の設置に全て変更を望む。筋山に風力発電はどうか。また、各施設や家屋の屋根に積極的には、太陽光パネルと蓄電池を設置する為の助成制度の確立を町や県に要望する。水道施設は安渡よりの本管より吉里吉里経由からの方が防災対策上必要と思われる。

#### (7) 被災地の利用計画

過日開催された、大槌町と赤浜部落との懇談会の席上、前川復興室長より公園化の回答を戴いた経緯がある。

公園化の折には、未曾有の大災害を風化させない為に、世界中のマスコミで話題となった観光船“はまゆり”を記念モニュメントとして復元する等、鎮魂の教訓を後世に伝える公園の建設を推進し、死者、行方不明者の名を刻んだ鎮魂碑や資料館の設置も併せて実現したい。

#### (8) 公共施設

公民館、郵便局、消防屯所及び避難所を併用した集会施設、また、非常時対応の備蓄倉庫等は早急に建設が必要であり、新たに建設する安全住宅地域に効率的に配置することが不可欠である。



また、もともと豊かな湧水をもつ地域の特徴を生かし、井戸を確保することも大切であると思われる。各家庭での井戸掘り助成や、近所間で共有する井戸を設置する。

また、筋山に風力発電施設とヘリポートの設置が緊急時の為に必要と思われる。

#### (9) 漁港及び関連施設

大槌漁港は、岩手県管理であるので、町漁協が地区漁業関係者の意見要望を十分に把握し、県への対応をお願いしたい。

また、海岸近くの県有地に、最大級の地震津波に対応し、50人～100人程度が収容可能な5階建ての緊急避難施設が必要不可欠である。

更に、その施設には、大槌湾の監視機能も装備させ、湾内の海上安全に貢献できるものにすべきと考える。

#### (10) 公営住宅建設について

仮設住宅入居条件として、2ヶ年との制約があり、その後の地域住民の住居の支援策として、赤浜地区の被災地以外の場所に公営住宅建設の早期実現を要望する。(赤浜地区住宅アンケートでは、将来の住居として37%が公営住宅を要望している。)

#### (11) 蓬莱島(ひよっこりひょうたん島)の早期復元について

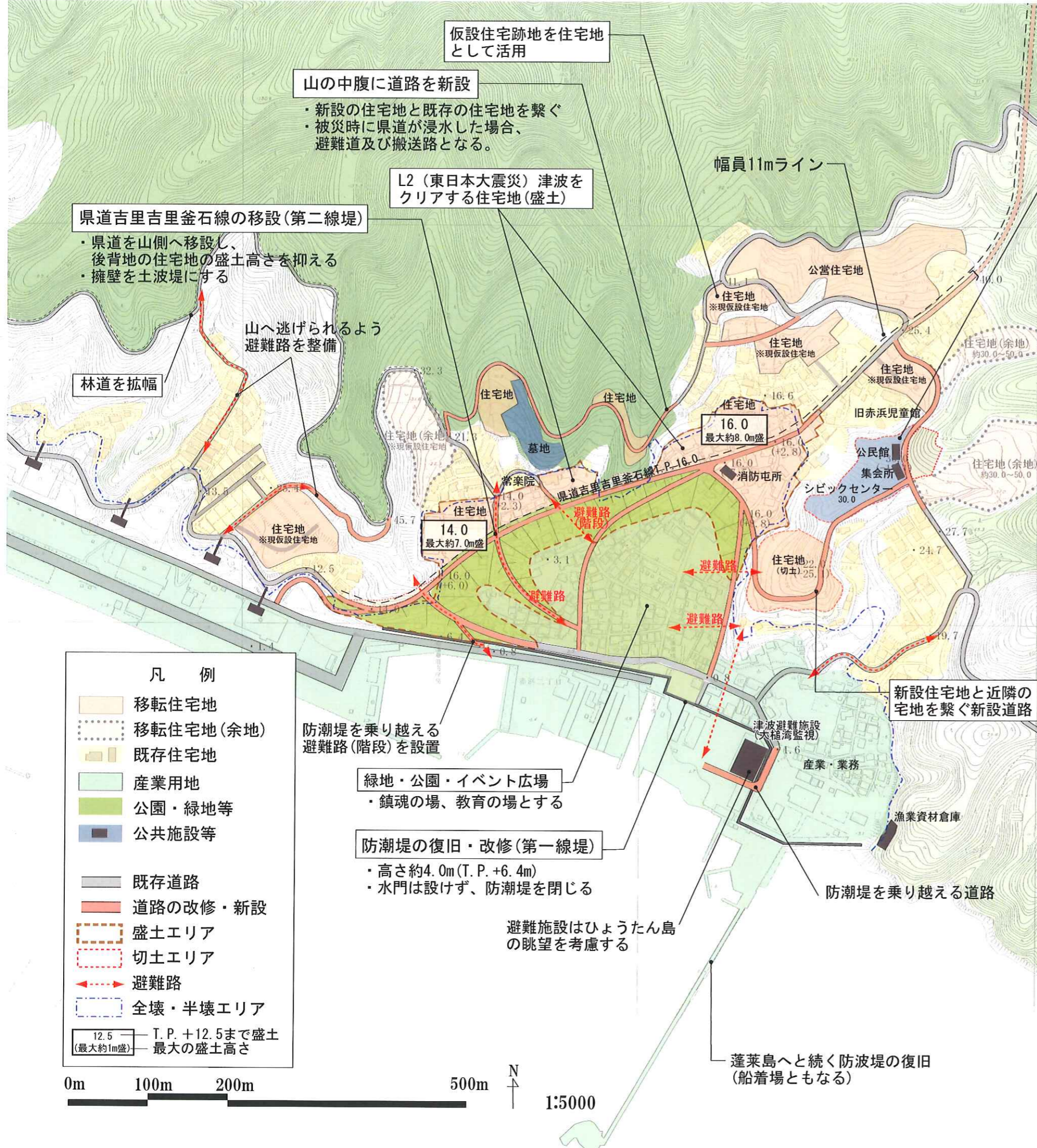
大槌町(湾)の象徴とも言える蓬莱島について、漁業関係者、また、町民の鎮守の島としての位置づけを再認識し、お堂の修理、松の木の補修等早期復元を要望する。

#### (12) 復興計画に伴う費用負担

この復興計画実施に伴う用地補償及び事業費については、全て町、県、国の負担とすることとし、地域住民の個人財産権を尊重することとする。

以上





**シビックセンター**

・日常の集いの場であり、災害時に避難場所ともなる。

〈補足〉赤浜地域復興協議会からの提案は図面の通りであるが、下記の点について補足する。

- 1. 土波堤防の採用**  
 県道を高くすることによって生じる擁壁は、垂直壁ではなく、土波堤防とする。しかし、低地部分の有効利用に十分に留意したうえで、適宜、柔軟に処理する。
- 2. 土石流や液状化等にも備えた安全な住宅地の整備**  
 高台避難は土石流や山崩れ等の危険を伴う立地であることに常に留意する。特に盛土は、液状化現象が生じやすく、今回の大震災でも住めなくなった盛土宅地がたくさんある。新たな災害を生まないように十分な予防をしたうえで、住宅地を整備する。
- 3. 防潮堤と市街地をつなぐ三つのルート確保**  
 船溜まりの辺りは多くの漁業者がいる可能性が高く、そこから市街地へとつながるルートを確認する。このルートは、漁業を営む者が日常的に利用だけでなく、避難にも有効である。さらに漁業には関与しない地域住民も散歩などで海辺に近寄ることができる。
- 4. 住み替えや新たな住まい取得の有効な仕組みの創設**  
 多くの世帯がいつせいに新しい敷地を取得しようとするので、混乱が生じる怖れがある。また、計画的な購入を希望する世帯も多い。皆がすべての情報をわかりやすく獲得し、適切な敷地を適切に安心して入手できる仕組みを、町が中心となって創設する。
- 5. 広場／公園／緑地の内容検討**  
 県道と海の間大きな面積をしめる広場／公園／緑地用地（農地等も含む）については、亡くなった方の鎮魂の場であると共に、津波災害を引き起こさないための教育の場である。具体的な整備内容については、町も検討してほしい。

**凡 例**

- 移転住宅地
- 移転住宅地(余地)
- 既存住宅地
- 産業用地
- 公園・緑地等
- 公共施設等
- 既存道路
- 道路の改修・新設
- 盛土エリア
- 切土エリア
- 避難路
- 全壊・半壊エリア

12.5 — T.P. +12.5まで盛土  
 (最大約1m盛) — 最大の盛土高さ



**緑地・公園・イベント広場**  
 ・鎮魂の場、教育の場とする

**防潮堤の復旧・改修(第一線堤)**  
 ・高さ約4.0m(T.P.+6.4m)  
 ・水門は設けず、防潮堤を閉じる

避難施設はひょうたん島の眺望を考慮する

蓬萊島へと続く防波堤の復旧(船着場ともなる)



## ■吉里吉里地域復興協議会復興計画

### 【まちづくりの方向】

- ・自然や環境に配慮し、地域のコミュニティを大切にしながら「安全」を最優先としたまちづくり。

### 【まちの中心・居住地・施設配置】

- ・居住地については、被災エリアより高い場所にコンパクトに住むことを基本とし、海側の被災したエリアは、非居住地として産業地・農地・緑地公園とする。
- ・国道45号線より山側に新設道路をつくり、その内側を盛土し、宅地や商業地を造成する。また、吉里吉里中学校周辺も宅地造成を行い、土石流への安全性を検証した上で、四丁目（古寺エリア等）付近の宅地造成も検討する。
- ・宅地造成する場所の決定に関しては、住民の意向調査の結果を踏まえ、集落が分散しないように配慮する。また、火災等も想定した安全なまちづくりが必要。
- ・まちの中心は震災前と同じく2丁目の周辺とし、主要な公共施設や商業施設を配置する。
- ・防潮堤の海側に建っていた施設は、すべて防潮堤の内側に移設する。
- ・まちの中心部や造成した土地に公営住宅を整備する。
- ・漁港の整備を早急に行い、漁業の復旧を迅速に行う。

### 【防潮堤】

- ・防潮堤の高さは明治三陸地震の津波を防ぐ高さとする（現時点ではT.P.+12.8m）。
- ・防護ラインの陸側から海側に出られる道路を確保する。
- ・防潮堤の天端部は日常的に散歩ができ、また、災害時には消防団等の緊急車両が通行できる仕様とする。
- ・防潮堤の上部を横断し、内外を結ぶ連絡道と、防潮堤の海側には、漁業者や観光客が利用する道路を整備する。
- ・防潮堤は観光資源となるようなデザインとし、観光機能を損なわないような景観にする。

### 【津波防御施設】

- ・漁業エリアや産業エリアには、津波襲来時に迅速に避難することができる施設（避難ビル等）を整備する。
- ・漁船の航路を確保し、沖合にテトラポットを入れる等の対策を行う。

### 【避難】

- ・個人及び事業者等すべてを対象とした避難訓練を実施するなど、今回の被害を50年～100年後も忘れることのないよう、「地震が起きたらすぐ逃げる」という意識づけ（津波防災教育）を、町や地域ぐるみで行う。
- ・防災及び防犯対策のため、避難道や主要道に街灯を整備する。

- ・JR山田線を越えて山側に抜けることができる避難道を整備する。また、避難道は大型車両や緊急車両も通行可能な幅員を確保する。

### 【環境】

- ・防潮堤を砂浜側に拡張することなく、きれいな砂浜を復元する。
- ・下水道を整備するなど海の水質に配慮する。
- ・フィッシャリーナの復旧を要望する。



# 吉里吉里地域復興協議会 復興計画図

**凡 例**

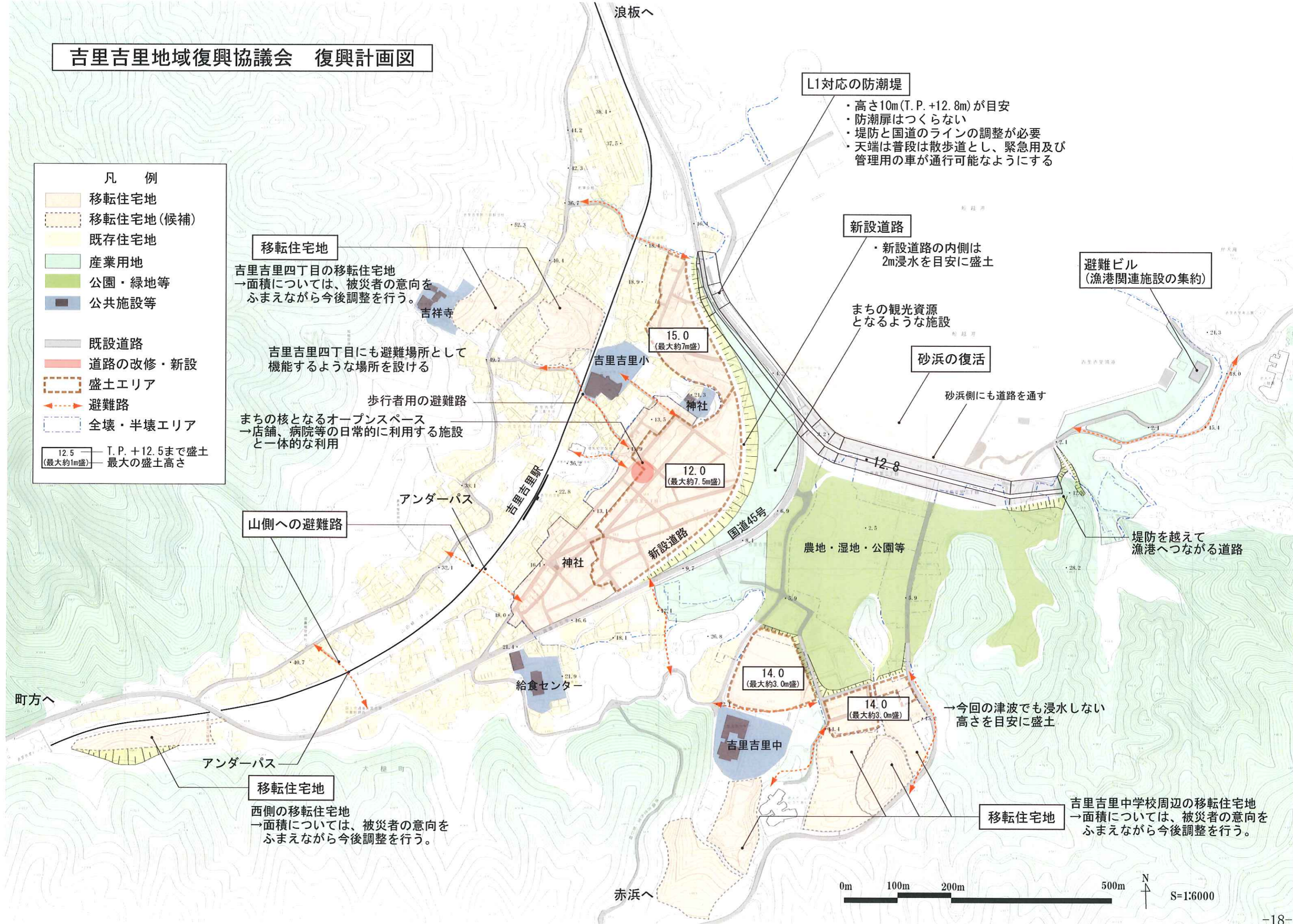
- 移転住宅地
- 移転住宅地(候補)
- 既存住宅地
- 産業用地
- 公園・緑地等
- 公共施設等

- 既設道路
- 道路の改修・新設
- 盛土エリア
- 避難路
- 全壊・半壊エリア

12.5 T.P. +12.5まで盛土  
(最大約1m盛) 最大の盛土高さ



**移転住宅地**  
 吉里吉里四丁目の移転住宅地  
 →面積については、被災者の意向を  
 ふまえながら今後調整を行う。

吉里吉里四丁目にも避難場所として  
 機能するような場所を設ける

歩行者用の避難路

まちの核となるオープンスペース  
 →店舗、病院等の日常的に利用する施設  
 と一体的な利用

**山側への避難路**

**移転住宅地**  
 西側の移転住宅地  
 →面積については、被災者の意向を  
 ふまえながら今後調整を行う。

**L1対応の防潮堤**

- ・高さ10m(T.P. +12.8m)が目安
- ・防潮扉はつくらない
- ・堤防と国道のラインの調整が必要
- ・天端は普段は散歩道とし、緊急用及び  
 管理用の車が通行可能なようにする

**新設道路**

- ・新設道路の内側は  
 2m浸水を目安に盛土

まちの観光資源  
 となるような施設

**砂浜の復活**

砂浜側にも道路を通す

**避難ビル**  
 (漁港関連施設の集約)

堤防を越えて  
 漁港へつながる道路

15.0  
 (最大約7m盛)

12.0  
 (最大約7.5m盛)

14.0  
 (最大約3.0m盛)

14.0  
 (最大約3.0m盛)

→今回の津波でも浸水しない  
 高さを目安に盛土

**移転住宅地**  
 吉里吉里中学校周辺の移転住宅地  
 →面積については、被災者の意向を  
 ふまえながら今後調整を行う。





## ■浪板地域復興協議会復興計画

### 【まちづくりの方向】

- ・住む人も訪れる人も思わず散歩したくなるような、観光地浪板にふさわしいまちづくり。

### 【まちの中心・居住地・施設配置】

- ・被災範囲より標高の高い山田線から三陸縦貫道の間、非被災集落と一体化するように住宅地を新設し、安全かつコンパクトな集落を形成する。
- ・大槌町交流促進センターや旧浪板児童館の並ぶ通りをメインストリートとして整備し、既存の公共施設を最大限に活用すると共に、付加価値を創出する。
- ・砂浜を再生し、美しい海を望める観光地としての浪板を復活させる。また、被災エリアには、緑地・公園・キャンプ場・スポーツ施設などを整備し、レクリエーション空間として最大限に有効活用する。
- ・既存集落から海側に張り出すように、眺めの良い場所を盛土し、民宿や旅館、ショップ等が並ぶ商業用地を創出する。
- ・大槌町交流促進センター付近や既存の仮設住宅地に公営住宅を整備する。

### 【防潮堤】

- ・高台移転を基本とするため、防波堤は現況の高さとする。

### 【津波防御施設】

- ・旧道をJR線と同じレベルまで嵩上げし、上部を地区内道路として活用すると共に一体的な幅広の堤防として整備する。
- ・緑地・公園内に一時避難可能な施設を整備し、観光客でもわかりやすい避難誘導標識を設置する。

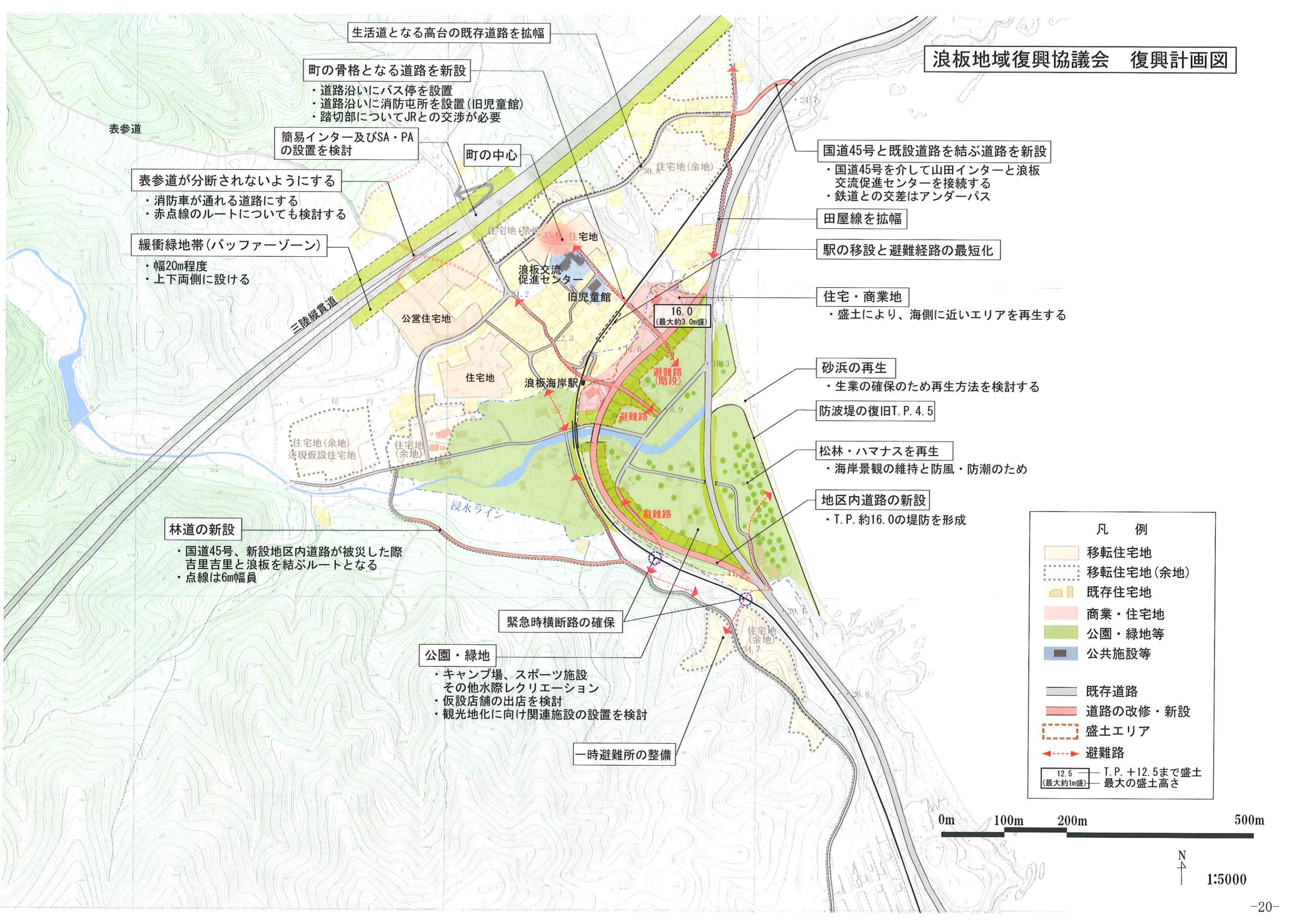
### 【避 難】

- ・大槌町交流促進センターと緑地・公園エリアを結ぶ、避難道及び町の骨格となる道路を新設する。
- ・車での避難を考慮した、既存道路（田屋線等）と新設避難路の十分な幅員を確保する。
- ・吉里吉里へ繋がる林道や既存の町道等については、まちの中心地との連携を考慮した整備を行う。
- ・三陸縦貫道により分断される表参道の機能回復として、大型車の通行も可能な道路を整備する。
- ・三陸縦貫道に緊急時の出入りが可能となる、簡易なインターチェンジを整備する。

### 【環 境】

- ・防潮林を整備すると共にハマナスを植樹する等、地域が一体となった「花いっぱい運動」を展開し、震災前の浪板海岸の再生を図る。





生活道となる高台の既存道路を拡幅

町の骨格となる道路を新設  
 ・道路沿いにバス停を設置  
 ・道路沿いに消防屯所を設置(旧児童館)  
 ・踏切部についてJRとの交渉が必要

簡易インター及びSA・PA  
 の設置を検討

町の中心

表参道が分断されないようにする  
 ・消防車が通れる道路にする  
 ・赤点線のルートについても検討する

緩衝緑地帯(バッファゾーン)  
 ・幅20m程度  
 ・上下両側に設ける

国道45号と既設道路を結ぶ道路を新設  
 ・国道45号を介して山田インターと浪板  
 交流促進センターを接続する  
 ・鉄道との交差はアンダーパス

田屋線を拡幅

駅の移設と避難経路の最短化

住宅・商業地  
 ・盛土により、海側に近いエリアを再生する

砂浜の再生  
 ・生業の確保のため再生方法を検討する

防波堤の復旧T.P. 4.5

松林・ハマナスを再生  
 ・海岸景観の維持と防風・防潮のため

地区内道路の新設  
 ・T.P. 約16.0の堤防を形成

林道の新設  
 ・国道45号、新設地区内道路が被災した際  
 吉里吉里と浪板を結ぶルートとなる  
 ・点線は6m幅員

緊急時横断路の確保

公園・緑地  
 ・キャンプ場、スポーツ施設  
 その他水際レクリエーション  
 ・仮設店舗の出店を検討  
 ・観光地化に向け関連施設の設置を検討

一時避難所の整備

凡 例	
	移転住宅地
	移転住宅地(余地)
	既存住宅地
	商業・住宅地
	公園・緑地等
	公共施設等
	既存道路
	道路の改修・新設
	盛土エリア
	避難路
	T.P. +12.5まで盛土 (最大約1m盛)
	16.0 (最大約3.0m盛)



N  
 1:5000



## ■小鎚地域復興協議会復興計画

### 【まちづくりの方向】

- ・大規模災害発生時の後方支援基地としての機能強化

### 【災害時の役割等】

- ・町場のバックアップ機能として大きな役割を担うことから、あらゆる状況を想定した機能強化が必要であり、また、小鎚地域で災害が発生したことも想定した、沿岸部との「互いに助け合う体制づくり」が必要となる。
- ・行政連絡員等との連携を強化し、小鎚地域に災害情報が伝わるようにする。
- ・小鎚地域での在宅受入可能人数やそれに伴う物資の必要量を把握した上で、個別で避難者を受け入れる際のマニュアルを整備する。
- ・地域に新しい防災組織をつくり、行政との連携が密接となる関係を築く。
- ・小鎚多目的集会所や小鎚小学校跡地を有効活用し、災害時に備えた食糧の備蓄、自家発電等を整備すると共に、防災時のコア施設としての機能を強化する。また、このコア施設は各在宅避難者とも連携を図ることができるようにする。
- ・町方地域への食料供給基地として蕨打直地区に拠点を整備する。

### 【災害時等を想定したインフラ整備】

- ・中山間地域として災害時に孤立する可能性も高いことから、小鎚・金沢間を結ぶ連絡道路又はトンネル等の整備、各方面へ抜ける迂回路の整備と除雪対策が必要である。
- ・新山風力発電について、災害時の利用の可能性を検討する。
- ・災害時に道路状況（通行止め等）を把握できる掲示板の設置が必要である。
- ・防災無線やテレビのデジタル化など、情報インフラの早期整備が必要である。

### 【その他】

- ・小鎚地域で受け入れた在宅避難者への支援（食料、エネルギー等）が手薄であったことから、町全体を考えた支援体制を構築する。
- ・災害時のコア施設は、地域住民が普段から利用しやすい環境を整えると共に、観光的な側面も持たせ、地域の顔となるような施設にする。
- ・小鎚地域には、昔から水車が多くあった。この水車を地域活性化に利用したい。
- ・雇用対策及び観光地として、新山の再開発を考えてはどうか。冬場でも新山にアクセス可能な道路整備も必要である。
- ・沢水や薪も豊富にあることから、自然エネルギーを活用した災害に強い地域づくりを目指す必要がある。

- ・重要な公共施設は、災害時にも指揮系統が麻痺しない安全な場所へ設置するとともに、地域のバランスと利便性を考慮した配置を行うべきである。
- ・高齢化も進み農業の担い手も少ない状況である。町からの移転者を募って活性化を図ることも必要である。その際は、小鎚地域の耕作地を宅地等に転用することも検討する。また、行政としても土地転用の相談窓口を設置するべきである。
- ・人口流出を防ぐためにも雇用の場を早期に創出するべきである。
- ・活気がある小鎚地域を創り出すために、人を呼び込み交流人口を増加させる取組みが必要である。



## ■金沢地域復興協議会復興計画

### 【まちづくりの方向】

- ・大規模災害発生時の後方支援基地としての機能強化

### 【災害時の役割等】

- ・災害時に避難者を受け入れることが金沢地域の役割であり、復興計画では、金沢地域を後方支援基地として位置付ける。
- ・金沢地域で避難者を受け入れる際のマニュアルを整備し、行政からの支援体制の強化が必要である。
- ・病人（透析患者）や障がい者、乳幼児や妊婦、高齢者等の受け入れ方法など、あらゆる状況に応じた支援体制の整備が必要である。
- ・金沢地域では公共施設（金沢支所、消防、警察、旧金沢小学校、旧金沢保育所、生活改善センター）が集約されている。休眠施設もあるため、それぞれに必要な役割を持たせ、ハード及びソフト面での防災機能の強化が必要である。
- ・後方支援が可能となる食料や薬品、ガソリン等の備蓄倉庫、電源を確保するための発電機、衛星電話等の通信インフラの整備は必須である。

### 【災害時等を想定したインフラ整備】

- ・土坂峠が町の命綱となった。トンネルの早期整備が必要である。
- ・小鎚・金沢間を結ぶトンネル又は道路整備が必要である。
- ・町場の情報が全くないことから、防災無線や情報インフラの整備が必要である。
- ・内陸部からの電源供給や河川での発電などを検討する。

### 【その他の意見】

- ・金沢保育所を福祉施設として活用するべきである。平常時でも需要があり、併せて雇用対策にもなる。
- ・金沢小学校を地域住民が利用できるように整備する。
- ・災害用に準備された機械の使用方法が分からなかった。沿岸部のみではなく、町全体で非常時を想定した避難訓練が必要である。
- ・米はあるが精米機が動かない。発電機とガソリンの備蓄が必要である。
- ・金沢地域で受け入れた在宅避難者への行政支援（物資等）が手薄であった。
- ・役場、消防、警察、病院等、公共施設は集約してほしい。
- ・防潮堤の防潮扉は遠隔化し、車で通行可能なスロープの設置が必要である。
- ・中央公民館は千人規模の避難所となったが孤立する危険性がある。避難所となり得る公共施設は孤立しない場所を選ぶべきである。